

弘前城かわら版

Vol.5 (令和4年12月15日)

約60年ぶりに実施してきた弘前城二の丸南門および三の丸追手門の保存修理工事において、各門の屋根に残されていた歴史的な痕跡について紹介します。

1. 屋根の変遷

慶長16年<1611>の弘前城築城時、城内にある建物の屋根には粘土瓦が葺かれていたとされますが、冬に破損しやすいことから、江戸時代中期の宝暦4年<1754>、木製屋根に銅板を被せる「銅瓦葺」へ順次更新する方針としたことが、「弘前藩庁御国日記」〔弘前市立弘前図書館蔵〕に記されています。

二の丸南門および三の丸追手門では、2階窓の庇（ひさし）に銅瓦葺の最古と見られる仕様が残っていました。瓦棒〔半円柱状の屋根木材〕に被せられた個々の銅板は約30cmと長く、粘土瓦に似せて本瓦葺風を作ったような仕様になっています。また、二の丸南門上層屋根の妻側には、江戸時代後期〔文化年間と推定〕と思われる銅瓦葺が残っていました。銅板の長さは約20cmで、銅板の前方にハゼ〔銅板の端を折り曲げる〕を付けて釘止めした後、銅板をたたんでいるため、銅板にシワが寄っているのが特徴です。

「令和の修理」では、窓庇と南門の上層屋根妻側に残っていた江戸時代の銅瓦葺を、文化財として価値の高いものと判断し、残しています。



弘前城跡で出土している粘土瓦



2階窓庇の銅瓦葺〔二の丸南門〕



二の丸南門上層屋根妻側の銅瓦葺



修理後の南門上層屋根
平側〔上〕と窓庇〔下〕

2. 屋根材の色合わせ

弘前城跡に残る5棟の城門は、門の上に物見を設けた櫓門（やぐらもん）形式であり、上層・下層の2重の屋根を備えています。今回の二の丸南門・三の丸追手門の保存修理工事では、ともに上層屋根において銅板の葺替（ふきかえ）を行いました。文化財建造物の修理では、できるだけ古い時代の状態を残すことが求められるため、それほど傷みの進んでいない下層屋根や、文化財としての価値が残る窓庇・二の丸南門上層屋根妻側等については現状維持としました。

葺替作業では、耐久年数が過ぎて再利用できない銅板を新しいものに交換する必要がありましたが、本来新しい銅板は光沢のある赤茶色をしており、それをそのまま葺直したのでは、屋根上で新旧の銅板に差が生じてしまいます。そのため、新しい銅板をあらかじめ薬剤に浸して酸化させ、表面に硫化銅被膜（りゅうかどうひまく）を生成させてから葺直すこととしました。これにより、葺替に用いる銅板の色に統一感が生まれ、修理前の雰囲気に近い状態の屋根を復旧することができました。



追手門 [櫓門形式：白線内は上層屋根]



修理前の上層屋根南門 [追手門]



色合わせ前後の銅板 [右：変色後]



新旧銅板の色 [南門 右：新 左：旧]